

Kappa Novels



お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけます。ありがとうございました。なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号112)

光文社 出版局

時代推理小説 地獄の辰・無残捕物控 首なし地蔵は語らず ￥350

昭和47年7月10日 初版発行

昭和47年7月15日 7版発行

著者 ささ ぎわ さ ぼ
笹 沢 左 保
東京都小平市学園西町1635

発行者 五 十 嵐 勝 彌

印刷者 盛 照 雄
東京都文京区水道2-4-26
慶昌堂印刷

発行所 東京都文京区音羽2 株式会社 光文社
振替東京115347 電話 東京(942)2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(明泉堂製本)
表紙の模様・意匠登録 116613 © Saho Sasazawa 1972

(分)0-2-93(製)02215(出)2271 (0)

時代推理小説

じ ごく たつ む ざん とり ものひかえ
地獄の辰・無残捕物控

首なし地蔵は語らず

さき ざわ さ ほ
笹沢左保



カッパ・ノベルス

目次

首なし地蔵は語らず	5
夜鷹 よたか が水を欲しがった	39
縁切寺 えんきりでら で女は死んだ	73
水茶屋 すみぢや の闇 やみ を突く	103
半鐘が赤い雪に鳴る	133
瓦版 かわらばん に娘が欠けた	163
賽 さい は知っていた	193

イラストレーション

堂^{どう}

昌^{しょう}
一^{いち}

首なし地蔵は語らず



1

川開きの花火を見てから、一カ月以上たっている。炎暑の日は、続いてきた。空は、抜けるように青かった。雲一つない。日中は、家の中にいたほうが寝やすいのに、落ち着いてそうしてもいられない。なんと首なしに、外へ出て来る人が多かった。

風通しの悪い家の中にいるよりは、と思うのである。確かに永代橋の上に立って、大川の風に吹かれていれば、気分的には涼しかった。しかし、その代わりに、直射日光を浴びなければならぬ。やはり暑い。人々は汗を拭いながら、恨めしそうに空を見上げた。

一雨来ないかと、誰もが思っている。夕立など、忘れてしまったような空であった。そうなると、ぶつける対象もなく怒りっぽくなるのだった。その喧嘩も、些細な理由から始まったのである。二人連れの男が、四人連れの男の真ん中を、割って通ったというのが喧嘩の発端だった。

場所は、永代の橋の上であった。永代橋は現在の隅田川、つまり大川の、最も河口に近いところに架かっている。

た。本所深川と日本橋界限を結んでゐる橋だから、大した交通量であつた。しかも、橋の上で風に当たりながら、女の着物の裾が翻るのを見て、ニヤニヤしている連中がいた。

そんな永代の橋の上で喧嘩が始まれば、人だかりのしないわけがない。たちまちのうちに、永代橋の深川寄りのほうに黒山の人だかりができた。左に高尾稲荷、右に船番所を見て永代橋を渡り、深川へ抜けるその橋の長さは百二十八間もあつた。

その深川寄りのほうで、喧嘩が始められた。橋に關係なく、深川の岸辺にいた者までが、次々に集まつて来た。火事と喧嘩は見のがさないのが江戸っ子で、男ばかりではなく、女もかなり見物人の中にいた。

四人連れのほうは、いずれも威勢のいい若い衆であつた。口々に、相手を罵つていた。それも、ボンボンと際限なく飛び出る、小気味のいい啖阿であつた。しかし、その啖阿が不意に、齒切れのいいものではなくなつたのだつた。

というより声が低くなつて、四人とも沈黙してしまつたのである。若い衆たちは、困惑した面持ちになつた。えらい失敗をしたが今さら、謝ることもできないし、引

つ込みがつかなくなつたという顔つきだつた。四人とも喧嘩の相手から、視線をはずしていた。

その二人連れのほうは、まだ一言も口にしていなかった。ひとりは二十五、六、人形のような美男子である。オシャレらしくて、結いたてのいなせな鬘が匂うようであつた。もうひとりのほうは、三十になるかならないかで、その顔に凄味が感じられた。

目が冷たくて、鋭いのである。いつでも誰かを、冷ややかに睨んでゐるといふ目つきだつた。眉毛が濃くて、鼻が高い。唇はやや厚いが、口もとが引き締まつてゐる。顔色がドス黒くて、両頬がこけていた。顔立ちは整つてゐるのだが、甘さというものがまつたくなかつた。

連れの男とは対照的に、髪の毛に手入れがなされていなかった。結いたての鬘どころか、月代がだいぶのびてゐた。太つてはいないが、背が高く、ガッシリとしてゐる。男っぽい男である。しかし、その男の雰囲気にはどうも、悪が感じられるのであつた。

相手の四人が、なぜ沈黙したのか。それはその男が、右側の腰にはさんであつた十手を抜き取つたからである。四人ともいままで、それが目にはいらなかつたのだつた。しまつたと思ひのは、当然であつた。岡っ引きと

の喧嘩では、相手が悪すぎた。

「あれ、あの野郎。十手なんかを、持っていやる」

「岡っ引きじゃねえか」

「千鳥橋の辰造だぜ」

「深川堀川町の辰造親分だ」

「あの地獄の辰造と呼ばれている御用聞きかい」

「そうだよ。本当に憎いね。あの四人で、寄ってたかって、辰造を半殺しの目に遭わせてやればいいんだ」

「あの連れのいい男は、辰造の自分というわけかい」

「そうだよ。役者の留三郎っていうんだけどね」

見物人の間で、そんなやりとりが交されていた。野次馬としてはもちろん、ここで喧嘩を中止してもらいたくはない。願わくば、岡っ引きの辰造が四人の若い者に打ちのめされることをと、期待しているのだった。

辰造は抜き取った十手を、黙って自分の留三郎に手渡した。そうしてから、辰造は一步前へ出た。その陰気な顔には、笑いというものがなかった。

「もう、十手を持ちちゃあいねえ。これで、五分と五分だ」

辰造は、言った。四人の若者は、なんとなく顔を見合わせた。尻込みしている。十手を十分に渡したからとい

って、相手が岡っ引きであることには変わらない。あとの祟りを、恐れているのである。

「喧嘩は、この場限りだ。あとあとまで恨みはしねえから、心配するねえ」

若者たちの胸のうちを見抜いたように、辰造は言った。それでもまだ、四人の若い衆は逡巡していた。

「いいかげんに、しねえかい。おめえたち、言いてえことをぬかしやがっただろう。そのくせ、今度は尻込みかい。江戸っ子はな、相手を見て喧嘩をするもんじゃねえ」

辰造が、声を張り上げた。その目が、鋭く光った。

「そうだそう。どうしたい、若いの！」

「やれやれ！」

「辰造の腕をへし折ってやれ！」

「岡っ引きを、たたんじまえ！」

「おれたちが、ついてるぞ！」

野次馬たちが、しきりと四人の若者に声援を送った。

辰造のほうはすっかり憎まれ者で、味方する人間はいなかった。辰造はそんなことを、頭から無視していた。誰からも憎まれていることは、とくに承知している。辰造は、無表情だった。

「よし、おれはやるぜ！」

四人のうちのひとりが、思い切ったように腕まくりをした。するとあとの三人も度胸を決めたらしく、それぞれ身構えた。辰造はどうすることもなく、うっそりと突っ立っていた。二人の若者が呼吸を合わせて、一度に飛びかかった。

辰造はひょいと身を沈めると、右側の男に足払いをかけた。同時にぶつかって来た左側の男を肩に担ぎ、そのまま頭から後ろへ落とした。頭から投げ落とされた若者は、脳震盪を起こしたらしく動かなくなった。辰造の動きは、実に敏捷であつた。

次に飛び込んで来た男の首を、辰造は小脇にかかえ込んだ。そのまま橋の欄干へ走った。その欄干の柱に、辰造は男の脳天を打ちつけた。男は仰向けに倒れて、動かなくなった。辰造は振り向きざまに、立ち塞がった男の脇間を蹴り上げた。

男は飛び上がって尻餅をつき、唸り声を上げて苦悶した。最初、足払いをかけられた男が、逃げ腰になった。辰造はそれに追い縋り、袴首を掴んで引き倒した。大の字になった男の鳩尾のあたりを、辰造は踵で激しく踏みつけた。男は、呻き声を洩らした。

ほんの十数秒間の出来事だった。四人の若い衆は橋の上に、思い思いの姿態で転がっていた。大人と子どももの喧嘩だった。辰造は表情を変えず、息を乱してもいなかった。辰造は留三郎から十手を受け取ると、さっさと西へ向かって歩いて行つた。

「畜生！」

「からだらしねえ連中だぜ」

「あの岡っ引きは、荒っぽいねえ。それに滅法、強いや」

「地獄の辰だもんな」

「本当に、憎たらしいねえ」

「誰か若い衆に、水でもぶっかけてやれ」

辰造が見事に勝つたことに腹を立てながら、野次馬たちはそろそろと移動を始めた。誰もが、辰造を憎んでいる。それは辰造が、岡っ引きだからだった。辰造に限ったことではない。岡っ引きは誰であらうと、嫌われ者だったのである。

粹な格好をして、キチンとした世帯を持ち、町の人々に親分親分と慕われている岡っ引きなどいなかった。そもそも、庶民の味方ではなかったからだ。岡っ引きというものは正規の職業ではないし、給料ももらっていない。

そうなると必然的に、十手をチラつかせて幾らかの金を包ませたり、目こぼしに袖の下を要求したりする。どちらかと言えば悪の世界に通じているくせに、権力の威を借りて大きな顔をしている。そうしたことから庶民たちに親しまれず、敬遠され、嫌われもするのだった。

月番制で交替する江戸南北の町奉行には、それぞれ二十五騎ずつの八丁堀与力が配置されていた。騎と数えるのは、与力には馬に乗れる身分が、与えられていたからである。与力は事務官であり、その配下に町方同心がいた。この同心が犯罪捜査、犯人逮捕の実務を行なうのであった。

同心はこの文化・文政年代に、南北両奉行配下として百二十人ずついた。同心は犯罪捜査と犯人逮捕を任されていたが、実務面で働いていたのは、それに使われている小者、岡っ引きであった。小者は正規の雇い人で、同心から給料をもらっていた。

しかし、岡っ引きとなると公に認められている職業ではないし、奉行所とはなんら関係のない連中だったのである。いわば同心の私設配下であり、正式な任命も身分の保証もなかったのだ。給料も、同心の小遣いの中から、もらっているようなものだった。

そんな給料では下女以下であり、とても食べてはいけなかった。だから、親分といわれるような岡っ引きになると、ほとんど女房に飲食業といった水商売をやらせていた。親分と呼ばれるからには、その岡っ引きには何人かの子分がいるはずだった。

その子分を、手先と言っていた。ほかに下っ引きというのがあるが、これは表向き完全な堅気の町人であり、岡っ引きや手先と行動をとるにはしない。しかし、下っ引きは手先に協力して密告者となり、いろいろと情報を集めて来るのだった。

目明かしは、岡っ引きと同意語である。だが、以前に瓜の仁助という目明かしが、あまりにも賄賂をとりすぎたので、老中松平左近将監がその逮捕を命じ、極刑に処した。同時に目明かしという名称も、禁じたのであった。以来、目明かしとは言わず、岡っ引きと呼ばれるようになったのだった。

御用聞きというのは、岡っ引きの尊称であった。いずれにせよ、犯罪捜査と犯人逮捕の実際は、同心が発行した手札を持つ岡っ引きと、その子分の手先によって行なわれた。同心は指示を与えたり、犯人逮捕を認めたりするだけであった。

同心だけでは町方の犯罪に、手も足も出なかったわけである。岡っ引きを、頼るはかはなかった。それでいて事件の解決は、すべて同心の手柄になる。だから同心にとって、岡っ引きはなくてはならないものだったのだ。

特に敏腕な岡っ引きとなると、同心には手放せない存在だった。深川堀川町に住む岡っ引き、千鳥橋の辰造は俗に地獄の辰とも呼ばれていた。ひどく変わった男である。辰造は、北町奉行小田切土佐守直年に属する町方同心、磯貝源之進のところへ出入りしている岡っ引きであった。

辰造はやくざ上がりだし変わり者だったが、磯貝源之進はそうしたことをまったく気にかけていなかった。磯貝源之進にとって、辰造ほど頼りになる人間はほかになかった。辰造は腕も度胸も抜群だし、事件の捜査に絶対的な勘を具えているのだった。

辰造のおかげで磯貝源之進は、何度手柄を立てさせてもらったかわからない。磯貝源之進自身も、優秀な同心には違いなかった。同心の職務にはいろいろあるが、やはり憧れの的は刑事事件専門の回り方であった。市中巡察を、受け持つのである。

それも臨時回りより、定回りのほうがいい。定回りの

同心となると、顔も売れるし名も売れる。そうなれば江戸市中の金持ちたちから莫大な付け届けがあるし、大名も扶持米をよこす。事実、六人の定回りは、優秀な同心の中から選ばれた。

十二歳から見習いに出て、定回り同心になるまでには二十年から三十年はかかる。その間に一、二度失敗があればもう回り方にはなれない。磯貝源之進は現在三十五歳だが、すでに定回り同心のひとりに加えられている。だから決して、平凡な同心ではなかったのである。

しかし、ここ数年は、辰造の功績がものを言った。辰造の働きが磯貝源之進の手柄となって、何度か褒賞を与えられ増給米を頂いていた。また去年には犯人逮捕の恩賞として奉行から、羨望の的である紫房の十手を賜わったのだった。

磯貝源之進にとって、それほど頼りになる辰造であった。その辰造がこのごろ、ますます変わり者の傾向を強めて来た。それが、磯貝源之進のやや気がかりな点だった。もともと辰造は、何を考えているのか、よくわからないう男だった。

二十九になるが、いまだに女房をもらおうとしない。腕のいい岡っ引きだから、手先にしてくれという希望者

が多かった。それなのに辰造は、役者の留三郎と銀太という二人の子分のほかは、受け付けようとしなかった。ひどく無口だが、やることは荒っぽい。

特に殺しの下手人となると、容赦はしなかった。だいたい、見た目にも変わっていた。月代をのびした岡っ引きとなると、ほかでは見られなかった。股引や白足袋はいい用いない。それに、持っている十手というのが、また変わっている。

真鍮製銀流しの十手に、実戦用のものは少ない。実戦用の十手となると、頑丈で重い鉄製のほうが効果的である。十手の長さは普通、一尺二寸から一尺二寸五分であった。いちばん長いのが二尺一寸だった。これは同心の実戦用で、長十手と呼ばれている。

辰造はこの二尺一寸の長十手を、常時携帯しているのだった。ほかの岡っ引きが三十七、八センチの十手を使っているとすれば、辰造は約六十三センチという長十手を持ち歩いていたのだった。その持ち歩き方も、辰造独特なものであった。

岡っ引きの十手の持ち方は内懐に差し込むか、角帯の右寄りに差すかであった。ところが辰造は、完全に腰の右側にやや斜めに差ししていた。刀のような握り方をし

て引き抜くなら、やはり腰の左側に差さなければならなかった。だが辰造は、逆手に持つようにして抜き取った。

そうするには、右手で腰の右側にある十手を引き抜くのがいちばんいい。しかも、その十手を抜き取る辰造の、目にもとまらぬ早技が評判であった。長脇差を持った男と対峙したとき、辰造が抜き取った十手で、まだ長脇差を三分の一も抜いていない相手の右手を一撃したという話は有名だった。

そうした男なら岡っ引きの仕事に、さぞ熱心なのだろうと思いたくなる。ところが辰造は、その逆だったのである。

2

翌日は、文化二年七月三日であった。

辰造は朝から、深川堀川町の家で六畳間でごろごろしていた。肌脱ぎになって、上半身は裸であった。色の浅黒い筋骨隆々とした胸板や腕が、辰造を遊ばせておくのがもったいないというように見せていた。ところが、当人は何を考えているのかまったくわからないような顔で

いるのだった。

深川は、運河が多いところである。堀川町も、ぐるりと運河に囲まれていた。水がないのは西側だけで、そこは佐賀町であった。辰造の住まいのすぐ近くに、橋が二つある。東へ渡るのが元木橋、南へ渡るのが千鳥橋であった。

千鳥橋の辰造と呼ばれたりするのは、そのせいであった。千鳥橋の向こうが加賀町で、その西は松平織部正の下屋敷である。周囲を水が流れているにしては、いっこうに涼しくなかった。風がないのである。窓の格子の外に吊つてある風鈴が、チリンとも音を立てなかった。

辰造は、例の長十手を弄もよほんでいた。十手の柄の部分には、簾しだづるが巻いてあった。その上に、黒漆くろしきが塗つてある。これは握つた手が、滑らないためのものだった。辰造は十手の柄についている鉄環を、指先で弾いたり回したりしていた。

その鉄環には、木綿こわたの紐ひもが二重に通してあった。この鉄環に本来ならば、房紐ふさひもがついているのである。しかし、それは与力や同心に限られている。江戸町奉行の与力や同心は、朱房しゆぼうの十手と決められていた。紫房もあるが、これは恩賞品である。紫房のほうが朱房より格が上

なのだ。

江戸の岡っ引きが、朱房の十手を持ち歩くことは絶対になかった。朱房も何も、江戸の岡っ引きは房紐ふさひもをつけることを許されていないのだった。それで代わりに、木綿の紐を二重にして十手の鉄環に通してあるのであった。別に、飾りのつもりではなかった。十手を使うと、その紐を右手首に巻きつけるためだった。そうすれば、十手を振り回したり、遠くへ投げつけたりできるわけだった。取り落としたときなども、すぐそれを手繰り寄せられるのであった。

「親分……」

隣の四疊半から、遠慮がちに声がかかった。役者の留三郎が、困惑の表情でいた。辰造は、そっちを見ようとしなかった。

「親分、いいかげんに腰を上げておくんないよ」

留三郎が辰造の横顔に、両手を合わせた。辰造は、返事をしなかった。ぼんやりと、頭上の神棚かみだなを見やっていた。

「風邪かぜを引いて寝込んでいるって言っても、磯貝の旦那はニヤニヤするだけで、取り合ってくださいねえんですよ」

留三郎がネズミ色になった手拭いで、衿もとの汗を吸い取った。

「だったら、辰造は死にましたと申し上げて来い」

辰造は、ニコリともしなかった。

「冗談じゃありませんよ、親分。銀太のやつだって、可哀そうですぞ。もう番屋とここの間を、五度も往復しているんですからね」

「銀太は、いま番屋にいるのかい」

「磯貝さまに、親分がどうして来られねえかを、説明しているんですよ」

「だったらついでに、もう少し時を稼がせておけ」

「親分、行つてやってくだせえよ。また辰造めが、いつもの癖を始めたなつて、磯貝さまは承知していなさるんですからね」

留三郎は、辰造の枕もとへ近づいて来た。こうなると独身の辰造にとって、留三郎は女房代わりであった。磯貝源之進は佐賀町の番屋まで来ているという。辰造に、何か用があるというのだ。同心が岡つ引きの住まいを、訪れるわけにはいかない。

それで磯貝源之進は佐賀町の番屋から、番太郎をよこしたのである。ところが辰造は、その招きに応じようと

しない。手先の銀太を番屋へ走らせて、辰造は病気で動けないと磯貝源之進に伝えさせたのであった。だが磯貝源之進は、それを本気にしなかった。

あとは銀太が番屋と、辰造の住まいを往復するだけだった。辰造は病気だと言い張り、磯貝源之進はニヤニヤしながら受け付けようとしなない。弁解と催促に往復する銀太が、ただ疲れるだけのことであった。

「どいつもこいつも、勝手なことを言いやがつて……」

舌打ちをすると、辰造は荒々しく起き上がった。支度も何もなかった。長十手を右の腰に差し込むと、辰造はさつさと入口のほうへ歩いて行つた。今度は留三郎のほうで、慌ててそのあとを追つた。

「親分、あつしは……」

「留守番しな」

辰造は、草履をつっかけた。そのまま辰造は、格子戸を足であけると表へひょいと出て行つた。運河に沿つて西へ向かうと、間もなく佐賀町の番屋であった。一枚に『佐賀町』もう一枚に『自身番』と書いた腰高油障子が、入口に嵌めてある。

辰造は、その油障子の一枚を、乱暴にあけた。五人の男がいつせいに、辰造のほうを見た。番屋の書役、番太

郎、土間にいた磯貝源之進の供の小者と銀太、そして源之進自身は、奥の琉球畳の敷いてある部分にすわっていた。銀太が、ほっとした顔になった。

「だいぶごねたな、辰造」

磯貝源之進が、ニッと白い歯を覗かせた。辰造は怒ったような顔で、黙り込んでいた。

「みんな、すまねえが座をはずしてもらおうか」

源之進が、立ち上がりながら言った。書役や番太郎、供の小者に銀太たちが、ゾロゾロと表へ出て行った。源之進は、土間のほうへ歩いて来た。小銀杏という粋な鬘で、着流しに紹の羽織であった。八丁堀の旦那特有のスタイルである。

腰には大小を落とし、朱房の十手を背中に差していた。短い羽織で帯に朱房の十手をはさんだという後ろ姿は、やはり八丁堀同心に限られていた。およそ武士らしからぬ下賤の者の言葉づかいを真似るのも、八丁堀同心の特徴であった。

「毎度のことだと言いてえだろが、辰造。頼まれてもらいてえことがある」

源之進が、立ったままで言った。なかなかの美男だし、年齢的にも脂が乗りきっている時期だった。それだ

けに源之進には、八丁堀同心のスタイルがびったりだった。

「浅草御蔵前の諏訪町の薬種問屋に、小倉屋新兵衛というのがおつてな。おれとは、懇意な仲だ」

源之進は、忙しく扇子を使っていた。辰造は、土間を右へ左へ歩き回っている。

「その小倉屋新兵衛から、頼まれたことだが……」

源之進は、小さく溜息をついた。源之進自身、頼みを引き受けるのが億劫で仕方がないらしい。しかし、引き受けなければならぬ、それなりの義理がある。江戸の金持ち連中は、定回り同心のところへ出入りをしたがる。

盆暮れや五節句などには、必ず付け届けを持って挨拶に来る。はつきりとした賄賂ではなく、何かのときはよろしくと頼みに来るのだった。小倉屋新兵衛も、そのひとりだったのに違いない。それで源之進は、頼みを断われないのである。

「四、五日前から、命を狙われていると心配している。そこで辰造、ご苦労だが念のために、当たってもらいてえんだ」

源之進は、辰造の反応を窺った。

「旦那、せっかくですが、お断わりいたしやす」

辰造は、冷ややかに源之進を見返した。

「そう言うな」

源之進は、さして驚かなかった。辰造がうんと言わないことを、予期していたようだった。

「あつしは、動き回るのがいやなんです」

「身体の具合でも悪いのか」

「気が向かへえんですよ」

「どうしていりゃあ、気がすむんだ」

「ただ、ゴロゴロしていてえんです」

「そうはいかねえ。今後も、大いに働いてもらわねえとな」

「もう岡っ引きなんて、馬鹿らしくてやってはいられやせんよ」

「なぜだ」

「退屈で仕方がねえや」

「つまり、おめえが乗り出すような事件が、さっぱりだというんだな」

「そうかもしれやせん。手めえのことを忘れるくれえ頭にカッと来る事件じゃねえと、この辰造は身がはいらねえんですよ」

「地獄の辰も近頃じゃあ、極楽にいるようなものかい」

「その辰造に、命を狙われているらしいなんて話を当たってみるとは、旦那も察しが悪すぎやすぜ」

「辰造……」

「引き揚げさせてもらいやすよ」

辰造は、油障子に手をかけた。

「待て、辰造」

源之進の顔が、厳しくなった。

「何かまだ、用があるんですかい」

障子に手をかけたままで、辰造は振り返った。

「おれも定回り同心、磯貝源之進だ。岡っ引き風情に背かれたとあっちゃあ、このまま引き退るわけにはいかねえ」

源之進の目が、異様に光った。

「どうするって、いうんですかい」

辰造は、表情を変えなかった。

「なぜ、みんなを追いつ出して、ここに二人だけになったのかわからねえのか」

「旦那には、何か魂胆があったんですかね」

「近頃のおめえは、わがままがすぎていけねえや。そこで今日は、おれに逆らうようだったら灸をすえてやろう